

シンガポールの親しい友人たちは例外なく超エリートだ。彼らは全員留学経験があるが、英米だけでなく日本や中国などにも留学又は滞在しているので、多様性のある考え方の持ち主が多い。共通言語は英語、中国語だが、第3言語もできるのが普通だ。大卒のトップクラスの初任給は6000シンガポールド（約48万円）である。競争に勝ち残れば高い報酬が約束される。シンガポールの高級公務員などは報酬も多岐分、義務感も強いように見える。一方で、就職してから競争は続き、成績が悪ければ自動的に10%くらいが退職を余儀なくされるという。

今年、弊社でシンガポールに現地法人を設立した。社員は就労ビザが必要になる。その取得条件が年々厳しくなっている。役職と報酬額と学歴がチェックされるが、海外赴任を計画していた1人に、日本の大学を辞めて海外留学した社員がいた。訳があつて留学先の大学も中途退学した。それでも、海外経験は充分なので、本人の実力をみて適格であると判断した。

だが、シンガポールのルールでは高校卒業としてしか扱わないので就労ビザが下りないのだ。外国企業の人材でも受け入れ条件が厳しいのには驚かされた。明らかに特権意識が働いており、シンガポールにとって下級労働者はすでに飽和状態で、シンガポールの国民の労働の機会をなくすので労働ビザを出せないというのだ。

## AROUND THE WORLD

山師の手帳 第18回 中村繁夫

### シンガポールのエリート主義と借景思想



「明るい北朝鮮」と揶揄されるほどの徹底ぶり

考えてみれば、私の孫娘は上海で地元の小学校に通っていたが、宿題の多さや毎日行われるテストで席順まで決まる猛烈教育のやり方を聞いて驚いたことがある。成長するアジア各国では、選抜制度があつて徹底したエリート教育が行われているのが当たり前なのだ。どうやらぬるま湯体質で悪平等教育を推進しているのは日本だけのようだ。

淡路島と同じ大きさの国土しかないシンガポールは建国当時、東南アジアの貧乏国家だった。マレー半島の先端に位置する港湾だけが頼りのその新興国家が1965年の建国後わずか50年間で世界に冠たる経済大国になった。2007年に日本の1人当たり名目GDPを追い抜いた。その秘密は何か？ その答えが「超エリート主義」と「借景思想」である。

大国の条件は「人口」と「技術力」「軍事力」と「資源」である。人口が少ないので、当然自国で育てるエリートだけでは足りない。大国の条件を備えるために「人材」と「技術者」と「資源企業」を外から集めた。借り物ではあるが、「小国」であるがゆえに「知恵」を使うしかなかったのだろう。

日本庭園は狭い土地を有効に使い遠景の山々を風景の中に取り入れ、遠近法を駆使してあたかも小宇宙のような幽玄の世界を

造った。これが「借景思想」である。

シンガポールは経済発展を達成してからも工業化社会から情報社会に舵を切り換えてきた。日本が足踏みをしているこの20年の間に、モノづくりよりも



「情報、知識、サービス」の割合を高めてきた。先進国家として勝ち残るために「金融、教育、先端技術、研究開発、エンターテインメント」などのソフト化への方向を目指した。

70年代にリー・クワン・ユー首相は日本の経済成長を見てルックイースト政策を取った。日本の優秀な官僚たちが目指していたことを真似て徹底して推進した。特に「教育」と「企業誘致」に力を入れた。シンガポールの社会は徹底した管理社会である。国際社会から「明るい北朝鮮」と揶揄されても「超エリート主義」と「借景思想」の看板を下ろさない覚悟が見て取れる。

〔なかもら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン(AMJ)社長。新著に「レアメタルハンター・中村繁夫のあなたの仕事を成功に導く「山師の兵法A to Z」(ウエッジ)。